様式第３号

令和５年度　学校経営報告書（自己評価）

学校番号	24	学校名	静岡県立伊豆の国特別支援学校伊豆松崎分校	校長名	松本　仁美

学校教育目標

「良さが輝き 未来をひらく」

一人一人が確かな学びを積み重ね、仲間や地域とつながりながら、自分の良さを生きる力へと輝かせ夢や希望を持ち、自ら未来をひらく（「開く」「拓く」「啓く」）人を目指す。

（校訓「地域に学び 地域に活きる人」）「地域に学び、地域に活きる人」

目標具現化の柱

ア（安全・安心）　命と健康を守り、人権を尊重し、一人一人を大切にする学校

イ（専門性）　確かな力を積み上げ、一人一人の良さを引き出す学校

ウ（連　携）　保護者や地域、松崎高等学校と連携し、生徒の社会参加を目指す学校

エ（チーム学校）　教職員が主体的に学校づくりに参画する学校

本年度の取組（重点目標はゴシック体で記載）

	取組目標	成果目標	達成状況	評価	成果と課題
安全・安心①	安全で安心に生活できる環境づくり	・役割や方法を全教職員が理解し、対応することができた。	マニュアルの改訂を職員に周知しそれに沿って対応した。	A	地域の方々を含めた防災訓練の実施を計画したい。
		・生徒に防災、防犯の備えが身についた。	避難訓練を繰り返す中で、放送を聞き避難時の行動をとることができた。	A	教室以外等様々な場を想定した訓練の実施。
		・生徒の意思や行動を大切にするなど人権を尊重した教職員の関わりができた。	教職員が人権チェックや研修を通して人権感覚が高まり行動した。	A	伝達講習やチェックリストの活用、声かけなどを続けたい。
		・互いを認め合い主体的に行動する「自己指導能力」が高まった。	上級生が下級生に教える場面が見られた。	B	生徒が主体的に活動できる場面を設定していきたい。
安全・安心②	**心身ともに健康に生活できる意識・習慣の確立**	・生徒が運動の良さがわかり、積極的に運動に取り組んだ。	生徒が具体的な目標と自己評価をしながら積極的に取組んだ。	A	目標と結果を可視化することで意欲が高まった。
		・生徒が保健指導で学んだことを日々の生活に活かした。	早速取り組んだり、家でも気を付けたりして日々意識することができた。	A	生徒によるプレゼンや体験型の活動が効果的だった。

	取組目標	成果目標	達成状況	評価	成果と課題
専門性①	**自立と社会参加を目指した教育（キャリア教育）の充実**	・生徒が自己の目標を理解し、各授業、実習に臨み、自己評価と改善に取り組んだ。	目標シートの工夫や評価基準の提示で生徒の自己評価につながった。	B	自己理解についてさらに研修を深めていきたい。
		・生徒が適切に自己表現するとともに学習に前向きに取り組んだ。	意欲的に授業に取り組んでいるが、自己表現が難しい様子も見られた。	B	表現方法の工夫や適切な伝え方など生徒に合わせた指導。
専門性②	**学習指導要領の「育成を目指す資質・能力」**	・教職員間で生徒の実態（アセスメント）や目標、各教科等の関連性を共通理解するとともに新学習指導要領に基づいたＰ	新学習指導要領に基づき生徒の目標や評価規準を明確にしながら、PDCA サイクルでの授業	A	教科横断的な視点で各教科を相互の関連でとらえ、さらにカリキュラム・マネジメン

様式第３号

	に基づく一人一人の「生きる力」を育成する授業の充実	ＤＣＡサイクルでの授業改善を行った。	改善を行った。		トや授業改善に取り組みたい。
専門性③	特別支援教育に関する専門性の向上	・教職員が研修等で学んだことを共有するとともに同僚への指導・助言を行い生徒の指導に活かすことができた。	校内で指導・助言し合うとともに外部研修参加者による伝達講習会を行い指導に活かした。	A	OJT での学び合いや伝達研修を引き続き行いたい。
連携①	生徒の個性を生かし多様な人々との協働を促す「共生・共育」の充実	・松崎高校との交流及び共同学習で互いを理解、尊重し、自ら協働的な活動に参加する生徒を育んだ。	生徒が交流行事に意欲的に参加し楽しむ様子は見られたが尊重し合うまではいかなかった。	B	事前打合せ、今後に向けた事後評価を丁寧に行い、協働的な活動を深めたい。
		・地域の人や関わる人々の共生・共育についての理解や意識が高まるよう教職員が目標を共有し連携、協働した。	様々な地域での活動を通して関係者の理解が深まり、生徒が積極的に活動した。	A	連携･協働が進むよう活動の目的や内容の整理を行いたい。
連携②	保護者、地域関係機関との行動連携の推進	・進路や地域福祉、関係機関等に関する保護者の意識が高まった。	施設見学会の実施や連携支援会議等で保護者の理解や意識が高まった。	A	キャリア教育に関係する校外学習の実施。
		・本校の教育や生徒への理解が地域や関係機関に広がった。	連携支援会議や移行支援会議などを通して理解が深まり連携した。	A	生徒の居住地域での理解を深めたい。
連携③	特別支援教育のセンター的機能の充実	・小・中学校等に機能が周知され、児童生徒、学校等への支援実績を積み重ねた。	地域学校関係からの要請が増え、支援実績を積み上げている。	A	今後もコーディネーターを中心に対応し、校内研修につなげたい。
チーム①	働きがいのある学校にするための業務改善の推進	・教職員が役割を理解した協働、タイム・マネジメント、受援力（援助要請能力）を高め、学校経営計画の実施に向けて協働した。	退勤時間を意識するなどタイム・マネジメントに取り組み業務改善につながった。さらに ICT を活用した業務改善に努めたい。	B	ICT を有効活用した働き方を紹介し業務改善に取り組みたい。
チーム②	信頼される学校づくりのための意識向上	・教職員が分校の価値や所属意識を感じるとともに、不祥事、交通加害事故、交通違反ゼロに取り組んだ。	教職員が分校の価値や周りからの期待を感じるとともに、自己理解に努め不祥事・交通事故ゼロを達成した。	A	「チーム学校」の一員としての役割を感じられるよう、風通しのよい職場作りに努める。